映画　バイオハザード－改造兵士の介入－

水川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
映画　バイオハザード－改造兵士の介入－

【Ｎコード】
Ｎ５２１３Ｐ

【作者名】
水川

【あらすじ】
ここはまた別の世界。パラレルワールド、ＩＦ世界、外史、いろいろな呼び方が当てはまるだろう。「学園黙示録」の世界に「オルフェノク」の力を与えられて送り込まれた邪神のオモチャ、水川司とはまた別の水川司が異なる世界に送り込まれた。
この世界は有名だ。邪神はマイナーな作品の世界に送り込むと言っていたが、ある意味間違いではない。この作品は世界的にも有名だが、二次創作としてはあまり手掛けられていない。そういう意味では、マイナーであろう。

さあ、はじめよう。この世界で生きようともがき、戦うものたちの姿を。

第一話　改造兵士　覚醒（前書き）

この作品は「学園黙示録　ＨＩＧＨＳＣＨＯＯＬ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＤＥＡＤ－獣戦士の誓い－」のプロローグから派生した作品です。「黙示録」の世界ではなく、「映画バイオハザード」の世界に行った水川司が生き残るために戦い、足掻きます。

少し「学園黙示録」の方で行き詰ったので、書いてみました。以前言っていた「怪物王女」ではないのでごめんなさい。

では、どうぞ。

第一話　改造兵士　覚醒

第一話　改造兵士　覚醒

「ギャギュギュ、ギョギョ？（どこだ、ここ？）」

あの邪神の送り込みの落下から目覚めた水川司。周りはどこかの部屋でもなければ、森の中でもない。閑散とした倉庫のようなところだった。なにより司自身の様子が変である。

「ギャギュギャ？ギャギュギョゴ、ギャギュギョギュ。（なんだ？発音、できない。）」

自分は喋っているつもりなのに、上手く発音できない。それは言葉だけではない。言葉所かその姿自体、もはや人間ではない。服は何も身に着けておらず、その肌は全体的に緑色をしている。鋭い爪を持ち、腕や脚にもノコギリのような鋭い棘がある。目は赤く、顎は割れ、鋭い牙を見せている。頭には二本の触角らしきものまである。

そして、司は己の姿を見た。傍にあるアルミの荷物カバーが司の今の姿を映していた。

「ギョギェギャ、ギョギェ？（これが、俺？）」

その姿は、仮面ライダー・シンだった。

自分の姿を確認した司は混乱した。無理もないだろう。目が覚めたらいきなり怪人のようになっていたのだから。でも、それが仮面ライダー・シンの姿であると気が付くと安心した。だが、人間の姿に戻ろうにも戻り方が分からず、心を沈めて落ち着いたり、念じたりしても戻ることはせず、また慌て出した。

１５分くらい経っただろうか。司は諦めたように座り込み、現在の状況を把握するために動き出した。

現在の場所はただの倉庫ではなく、装甲列車が停車している駅のホームのようであった。人影は全く無く、物音もしない。出入り口を思わしき場所は、不気味にも扉が開いたままになっている。そして、ここにある荷物から列車にいたるまで同じマークが付いている。一瞬、司はそのマークが核のマークだと思い、ここは核廃棄物保管場所だと思った。だがよく見れば、それは八角形の赤と白のマークで核マークとは違った。

「（核のマークじゃないけど、何なんだ、ここは？しかも、なんでシンの姿なんだ？変身してないのに。俺に一体何をしろって言うんだよ、ナイアさん。）」

司の心情は悪いほうへ傾いていき、泣きたくなってきた。もともと臆病なところがある司、初めてのことに対しての耐性がそれほど無いのである。しかも、どこか分からない、自分は人外になっている、これからどうなる等など、不安ばかりが押し寄せて恐くなってしまう。

『もしもし、聞こえるかな？』

突然の声に顔を上げ、周囲を見回す司。

「ギャゴギャ！！（誰だ！！）」

だが、周囲には誰も居ない。

『ボクだよ、ボク～。君のお母さんだよ～～。』

「ギュギャギャギョ　ギュギャギャギェ！！（姿をあらわせ！！）」

お母さんというのはスルーし叫ぶが変わらず誰も居ない。

確かに俺を生み出したのはナイアさんだけど、一体どこに！！？

『ああ、ボクはテレパシーで話してるからその世界には居ないよ。そっちも念じれば話せるよ。』

《え！？マジ？》

『マジマジ～＾＾』

《ナイアさん、ここはどこなんですか？何より俺の体はどうなってるんですか？》

『お母さんって呼んでくれないの？』

少し残念そうに話すナイア。

《いきなりは無理です。ちょっと慣れなくて。ごめんなさい。》

『う～ん。まあ、良いか。それよりも現状だよね。自分でやってお

きながら、結構ヤバイところの送り込んじゃったな～って反省してたんだよ。』

《はあ！！？ちょっと待ってくださいよ！自分でやっておいてヤバイって、どこなんですか！！》

『その世界はね、「バイオハザード」の世界なんだよ。』

《・・・・・・・・・・・・・マジですか・・・・・・・・・》

『うん。だからその姿にしたんだよ。それならゾンビ相手でも無敵だからね。タイラントとかでも互角以上に戦えると思うよ？』

軽い感じでそんなことを言うナイア。反対に司は内心でものすごく慌てている。

《俺、バイオのゲームほとんどしたこと無いんですよ。最初の作品も３０分くらいでやめて、攻略本読んだくらいですよ。》

『うーうん。君はこの世界をきちんと知っているよ。「バイオハザード」は「バイオハザード」でも「映画　バイオハザード」だからね。』

司はゲームはプレイしていないが、映画は見ていた。だから、現在の場所がどこが気付いた。

《このマークは「アンブレラ」のマークだったんだ。そういえば、ビーチパラソルっぽい。ということは、ここはあの洋館の地下ですか？》

『いいや、ハイブの出入り口の方だよ。さらに言うけど、後2時間もすれば完全に封鎖されるからね。』

《え、もう原作始まってんですか！？なら、早く脱出しないと！》

『残念だけど司にはハイブの中に行ってもらわなくちゃいけないんだ。』

《何でですか！いくら超人でも戦いは素人なんですよ！》

『君を介入させたせいか、原作と変わっちゃったみたいでね。リッカーが3匹ほど出ちゃったみたいなんだよ。』

リッカーというのはこの「映画　バイオハザード」のラスボスにあたる存在である。本当なら1匹のはずだが、この世界では3匹を相手にしなくてはならないようだ。大きさは人間より少し大きいくらいで、一応拳銃は効くらしいがすさまじい敏捷性と凶暴性、攻撃力を持ったモンスターである。

《・・・リッカーを生身で相手にしろと？》

『生身じゃないよ。ちゃんと力は上げたでしょ。』

確かに仮面ライダー・シンは仮面ライダーの中でも異色の存在である。機械的な改造人間でも強化スーツでもなく、バッタの遺伝子を組み込んだ改造兵士である。生物的な身体強化でバイオサイボーグと呼ばれる。
歴代ライダーのような必殺技は無くパンチやキックも劣るが、身体能力は全ライダーの中でも上位に当たる。体その物が武器であり、

最大の武器は超再生力と進化機能である。たとえ腕を切り飛ばされても数秒で再生し、限界の無い進化はあらゆるエネルギーを吸収し、能力を無限大に上げていく。さらに、仮面ライダーには珍しいテレキネシスやテレパシーといった超能力を持っているといわれている。その力は人間の頭くらいなら簡単に潰すことができるという。

『まだ不安そうだね。』

《当たり前です！》

いきなり凄い力をもらったからと言ってもすぐに使いこなせるわけではない。しっかりと訓練をし、自分の力を把握し、磨くからこそ強くなれるのだ。

『ちょっとジャンプしてみなよ。あの天井めがけて思いっきり。』

《シンの力で跳んだら危ないんじゃ》『いいから。』

そう言われて司は天井めがけてジャンプする。

《うわあぁぁぁぁぁ！！》

その体は天井に届くどころか激突し、さらに落下して地面に叩きつけられた。

『どんな感じだい？』

《どんな感じって！自分でも驚くくらい跳んで、案の定激突したよ！！》

『痛みはあるかい？』

《え？そういえば。なんだか発砲スチロールにでもぶつかった感じだった。》

仮面ライダー・シンの全身はセラミックの５倍の強度を持つ甲殻細胞に覆われており、皮膚は攻撃に対する衝撃の７５．０％を吸収、打撃・斬撃にかかわらず肉体本来の２５．０％以上のダメージを与えることは理論上不可能であるとされている。ジャンプ力も垂直で１００メートルを超えており、幅跳びにすると２００メートルを超える。

『次はそのコンクリートの柱にチョップしてみなよ。』

そういわれて司は言われるままに柱にチョップする。すると柱を抉り取ってしまった。司の方は痛みは無く、ここでも発砲スチロールを殴ったような感触だった。

《スゲーー。自分の身体じゃないみたい。》

『それだけの頑丈さと腕力があれば大丈夫だろ。たとえ動きが素人でも何とかなるって。』

《そうなんですかねー。》

どんなに身体がチートでも中身は一般人。いきなりゾンビの蠢く建物に入れといわれても、簡単に決心が出来るわけない。

『言っておくけど、助けに行かないと十中八九全滅するからね。さらに言えば、彼女達がいないと生存フラグは立たないから。』

《やっぱり・・・ですか。》

この「映画　バイオハザード」の困難な点は敵よりも武器が少ない事である。ゲームだとあちこちに銃だの弾丸だのあるが、これは現実の世界。そう都合よく手に入るわけではない。しかも、これは最初の遭遇戦でほとんど銃器を使い果たしたという展開である。銃が無くてここを脱出するという悪夢が今ここで起こっている。

《ええい！！！もうやけくそだ！！行ってやろうじゃんか！！！》

もう司は悩むのを放棄した。このままウジウジ迷ってる間に死ぬのなら、やるだけやった後死のう、と吹っ切れた。

『がんばってね。施設内のナビくらいはしてあげるから。あれ？どこ行くの？』

そう意気込んだはずの司が施設の出入り口の方でなく、列車の方に向かっていたからである。そして司は列車から１つの大きなバックを持ってきた。

《どうせならこいつを持ってくよ。これがあれば中に居る人たちと友好的に話し合えそうだから。》

司が持ってきたのは映画の冒頭で盗み出された「Ｔ－ウイルス」と「ワクチン」のケースが入ったバックだった。
いくら中身が人間でも司の見た目は１００パーセント怪物である。

こんな姿で彼女達の前に現れても逃げられるか撃たれるだけである。
なら、少しでも自分が味方である証明をするために「ワクチン」の入ったバックを持っていく事にした。

そのバックを肩に掛け、司ことシンはハイブに　足を踏み入れる。

《逝くか。》

『逝こう。』

2人（正確には1匹と1柱）は間違った言葉をわざといい、死の巣窟を進む。

第一話　改造兵士　覚醒（後書き）

まだ「学園黙示録」のほうが区切りが付いていないのに、新しい作品に手を出してしまいました。

作品を書いていてモチベーションの維持がものすごく難しい事を実感しました。連続して書いている作家の方達に敬意を表します。

こちらは気晴らしの面が強いので、更新は不定期になると思います。

この作品も「学園黙示録」共々よろしくお願いいたします。

第二話　改造兵士　戦闘（？）（前書き）

連日投稿です。

「黙示録」が詰まっているのに、なんでこっちは書けるのでしょう。

第二話　改造兵士　戦闘（？）

第二話　改造兵士　戦闘（？）

邪神　ナイアのナビゲーションの下、ハイヴを進む司こと改造兵士シン。

エレベーターホール、非常階段と今のところ問題なく進むことができた。
しかし司の内心は不安でいっぱいだった。いつどこからゾンビやリッカーたちが襲いかかってくるのかビクビクしていた。いくら身体や能力がチートでも恐いものは恐い。ここはゲームやテレビの中の事ではなく、司にとっては紛れもない現実である。
いくら邪神のナビゲーションがあるからと言って早々安心できるものではなかった。

『いつまでビクビクしてるんだい。さっき決心したんじゃなかったのかい？』

司のびくつく姿を注意するナイア。

《無茶言わないでくださいよ。この恐さは半端なもんじゃないですよ！ゲームとかならどこから出てくるとか予め分かりますか、現実でするとと自分で確認しながら進むしかないんですよ。》

『だからボクがちゃんと案内してるじゃない。』

《自分で確認しないと安心できないタイプなんです、俺！！》

『ゾンビがダース単位で襲ってきても大丈夫な身体してるのに。』

実際にゾンビが大挙して襲いかかっても今の司なら余裕で無事だろう。

だが精神的には全然大丈夫ではない。

自分の中では「これはゲームだこれはゲームだ」とか「出たらすぐに攻撃攻撃」といった自己暗示や対処方法を頭の中で反芻しつつ進んで行った。

『そろそろだね。』

研究室エリアに入る前にナイアが突然言った。

《そろそろって何ですか？》

司は気が気じゃなかった。これまで運良くゾンビたちに会わなかったが、ここからはまさに危険度が跳ね上がるエリアだ。司の本心としては引き返したくてたまらない。

『この扉を開けたらお待ちかねの敵だよ。』

《待ってない！待ってない！！》

声を大にして叫びたい。

『司は待ってなくても相手は待ってるみたいだよ。』

《そのままお帰りしてもらってー！！》

もう司は泣きそうだった。ハイブに入る前の開き直りも霞んでしまうほどの恐怖がある。

『どの道戦いは避けられないんだから、いい加減腹を括りなさい。』

《こういう時に真面目になるなー！》

『迷ってもしょうがないから、開けるよ。はい、三秒前～』

《待って待って！》

『二秒前～。』

《早いよ！》

『一秒前～。』

《だー！くそ！！》

『はい、オープン！』

扉は開かれた。

だが、何も襲いかかって来なかった。

司はゾンビの大群がいると思い身構えていたが、肩透かしをくらった気分だった。

《はぁー。脅かさないでくださいよ。相手って何も居ないじゃないですか。》

『足元。』

そう言われて足元に目を向けると、そこにはゾンビだったものがいた。そのゾンビはピクリともしない。

《這いずりゾンビが俺の最初の相手ですね。これくらいなら楽勝ですよ。》

『よく見てごらん。』

ナイアに言われてそのゾンビだったものをよく見る。それは頭のない死体だった。だから、ゾンビ“だった”もの。

《ううぅ。グロすぎる。これ、何なんですか？》

吐き気を覚えながら、ゾンビだったものを確認した司が聞く。

ポタ　ポタ

突然司の肩に水滴が滴る。研究室は水没していたので、てっきり水かと思ったが、その水滴は赤かった。

それに気付いた司は動きを止める。

《ねえ、ナイアさん。》

『なんだい？』

《相手が待ってる、て言ってましたよね。》

『言ったよ。』

《その相手はゾンビなんじゃないのですか？》

『ボクは一言も相手がゾンビだって言ってないよ。』

《俺、動画サイトで見たことあるんです。この登場の仕方をした敵。》

『まあ、初戦闘にはキツいけど、頑張れ。』

司は意を決して、滴り落ちる水滴の元を辿り、見上げた。

そこには牙を血で塗らした一体のリッカーがいた。

第二話　改造兵士　戦闘（？）（後書き）

最初の敵がボスであるはずのリッカー。
まだゾンビさえも倒すどころかあってもいないのに、いきなりボスです。

「黙示録」とは違い精神的に弱い司。これがいったいどうなるのやら。

よろしくお願いします。

第三話　改造兵士　必死（前書き）

第三話投稿です。

いきなりボスに出会ってしまった司。どう切り抜けるのか。

副題でウソは言ってません。

第三話　改造兵士　必死

第三話　改造兵士　必死

天井には牙を血で塗らしたリッカー１匹。

「ギャァァァーーー！！（ぎゃぁぁぁーーー！！）」

それを見た司は叫んでパニックになった。ゲームの中でも気持ち悪いと思える生き物が現実にいて、こっちを伺っている。映画で見たときもグロテスクだったが、実際に見ると吐きそうなくらい気持ち悪い。

司の叫び声を聞いてリッカーが飛びかかってきた。司は必死になって体を動かし、前に転がって避けた。

「ハア！ハア！」

振り向いてリッカーの姿をより近くで見た。大きさは人間より少し大きいくらいである。どうやら新鮮な人間をまだ食べていないせいか、変異していない。

それでも恐いモノは恐い。

ビジュアル的には人間型モンスターＶＳ獣型モンスターなのだが、司の心は恐怖でいっぱいだった。

『さあ、あの出来損ないをやっつけるんだよ！』

煽るナイア。そして司のとった行動は、

逃亡だった。

リッカーに背中を見せ一目散に走り出す。

『ちょっとちょっと。何逃げてんのさ。』

《無理です無茶です無謀です！何より恐いです！！》

チート主人公なのに情けない事この上ない姿だった。周囲も気にせず、とにかく必死で逃げる。

仮面ライダーの身体能力のせいでリッカーといえども追いつけない。また進路上にゾンビが出てきたが、それを無我夢中で薙ぎ払い、走り続ける。薙ぎ払われたゾンビは尽く壁や床、天井に叩きつけられてやられていった。

道筋も確認せずにゾンビを薙ぎ払いながら走る司。その頭にはリッカーから逃げることしかなかった。

研究室エリアをひたすら走る回り、その走路にいるゾンビは巻き込

まれてやられる。そして、息を切らせながらいつの間にかオフィスエリアに来た。

「ハッハッハ。」　《あれ？ここ、どこ？》

自分でも今どこいるのか分からなくなっていた。

『呆れていいのか感心していいのか。あれだけ派手に逃げておいてバックはしっかりと持ってるし。今居るのはオフィスエリア。もうちょっとでクイーンの部屋。そこに生存者たちが居るよ。』

《え！？マジ！》

ナイアの言葉に嬉しさを表す司。　逆にナイアは不満気味である。

『何やってんだい。せっかくの実戦だったのに、いきなり逃げるなんて。』

《いや、それは。》

『相手の攻撃なんて大して効かないんだから、ただ殴るだけでも良かったのに。根性なし。』

《うぅぅ。面目ない。》

『ゾンビは相当な数を倒したのに、どうしたんだよ。』

《俺、ゾンビ倒しましたか？》

ナイアが言ったゾンビを倒したことに疑問を覚える司。

『自覚なしかい。あれだけ吹き飛ばしといて。少なくとも１０匹は倒したよ。』

無我夢中に走り回ったせいで、司自身も気付かないくらいの数のゾンビを倒していた。仮面ライダー・シンの身体能力は現在の時点でもタイラントやネメシスと互角かそれ以上である。そんな身体能力の司が思いっきり走ってぶつかれば当然相手は無事ではすまない。司の逃げ回ったところは壁や床、天井に赤い花が咲いているだろう。

『そんなに近付くのが嫌なら念力でも使ったら？一応司も使えるはずだよ。』

そのような助言をしてくるナイア。

仮面ライダー・シンはテレキネシスやテレパシーといった超能力を使うことができると言われている。原作でそれらは大して使われなかったが、その威力はかなりのもので、テレキネシスは人間の頭くらいなら簡単に潰せるくらい出来ると言う。

そんな思考をしているとちょうどゾンビが一匹だけふらふらと歩いていた。

『ちょうどいい的があるね。あれで試してみるといいよ。』

かなりひどい表現だが邪神にとってはそんな認識なのだろう。

《んーーーーーうりゃ！》

イメージはクラッカー。するとそのゾンビの頭は弾け飛んだ。赤黒い血や白っぽい脳ミソやどこの部分かよく分からない肉片を飛び散

らせながら。

『うまいじゃないか。』

ナイアは喜んでいるが司の方は大変である。壁に手をついて吐き気をこらえている。シンの身体の能力はケタ違いである。当然視力も相当良くなっている。その優れた視力で人間の頭が弾けて中身が飛び散るのを直に見たのでこうなった。

『ちょっと、ちょっと。大丈夫かい？』

《うぇ、俺、しばらく何も食えないです。》

『それにしても仮面ライダーが吐き気をこらえてるってシュールだね。』

《うるさいです！！うぇぇぇ。》

仮面ライダーが吐き気をこらえているという、世にも貴重な光景がラクーンシティの地下で繰り広げられているのであった。

《今度から首を折るなり頭を陥没させるようにして使います。》

『まあ、それが妥当かな。毎回吐きそうになってちゃ世話ないからね。』

あの後また数体ゾンビが襲いかかってきたが、全て念力で対処した。頭を吹き飛ばすのではなく、壁に叩きつけたり首の骨をへし折った

りして倒したので、最初のような猟奇的な光景にはなっていない。

『そろそろクイーンの部屋だよ。あれ？クイーンの電源が入ったみたいだよ。』

《なら急がないと。地下に逃げられたら如何しようもない。》

急いでクイーンの部屋に向かう司たち。部屋の扉の前にはかなりの数のゾンビが集まっていた。そいつらも司に気付いて襲い掛かってきたが、念力で首を尽くへし折っていった。対処し切れない時は蹴り飛ばした。

《ここだね。》

『うん、ここだよ。』

バックがあることもしっかり確認して扉のロックに手をかける。

《いくよ。》

司はクイーンの部屋につながるコンピュータールームの扉を開けた。

第三話　改造兵士　必死（後書き）

はい。”必死”というのは”必死”で戦うのではなく、”必死”で逃げました。
前回の”戦闘（？）”は「戦闘が始まるのか？」ではなく「戦闘自体するのか？」という意味がありました。

チートなのに逃げてここまで来ました。逃げ切れたこともチートですが。

いよいよ次回主人公たちと出会います。衝撃的な出会いとなるでしょう。いろんな意味で。

では、これからもよろしくお願いします。

第四話　改造兵士　出会う（前書き）

つい先ほど書きあがりました。

このバイオハザードの翻訳はＴＶ放映版とは違うものを使っています。なので、台詞に若干の違いがあります。

第四話　改造兵士　出会う

第四話　改造兵士　出会う

≪レッドクイーンの部屋≫

【ウイルスに感染したものを外に出すわけにはいかない。】

「お、おい。待て、俺たちは感染してない。」

【感染者に噛まれたり、引っ掻かれたりするだけで、その人も感染者になってしまうの。】

ハイブ管理ＡＩレッドクイーンにＴ－ウイルスおよび感染経路の説明をうけるアリスたち。レッドクイーンに自分達を地上に返さないと言われ慌てて反論するスペンサー。

彼女達はこのハイブに取り残された生存者。
ハイブの非常用出入り口を守るエージェントであるアリスとスペンサー。ハイブの防衛システムである神経ガスによって現在記憶を失っている。
ハイブに異常が起こったため送り込まれた特殊工作員のレインとカプラン。他の工作員は全員死亡した。
最後に、自称警官であるマット。本当はアンブレラ社の悪事を暴くために侵入しようとしたところをレインたちに捕縛された。

任務は暴走したレッドクイーンのコンピューターを止めること。それは成功するものの、レッドクイーンを止めたおかげで閉じ込めておいたゾンビの扉の電子ロックまで開いてしまい、アリスたちは来た道を戻れなくなってしまった。
ゾンビは実験で生み出されたものではなく、全員ハイブの元職員。レッドクイーンはＴ－ウイルスが漏れた事で感染した恐れのあるハイブの職員全員を処分することをした。それを知らなかったアンブレラ社は特殊工作員を送り込み、現在の状況となったのである。

【インジケーターによれば私のメインドライブの保護回路が外されたようだけど、理由を聞かせてくれない】

「保険よ。逃げ道を教えて欲しいの。協力しなかったらいつでもスイッチを押す。分かった！？」

後一時間で非常用出入り口も完全に封鎖され援軍が来る可能性もまったくない。彼女たちはこのハイブを管理しているレッドクイーンを再起動させ、逃げ道を教えるように脅した。もし断れば、回路を完全に破壊するという脅しで。
だが、その脅しもイレギュラーの存在で断ち切られた。

【教えてあげてもいいけど、何かがこっちに来てるわ。元職員でもなく、私のデータにもない何かが。】

ガコン

レッドクイーンの部屋に通じるコンピュータールームの扉が開かれ

た音がした。あそこの扉の外には大勢のゾンビでひしめき合っていた筈である。そんな場所の扉が開くのは生存者くらいであろう。

「何？」

バタン

扉が閉められた音がした。

「Ｊ．Ｄ！！Ｊ．Ｄなのか！！？」

レインが銃を構えながら叫ぶ。Ｊ．Ｄとはゾンビ襲撃の際に大群のゾンビに飲み込まれてしまった特殊工作員の名前である。レインとは友人であった。他の工作員は部屋の防御システムのレーザーによって切断させて死亡したので、生きている可能性があるのが彼だけになる。

だが、其処にいたのは彼女達の想像を超える存在だった。

《なんだかドキドキするな。》

扉を閉めた司は妙な緊張感に包まれていた。主人公達に会える期待なのか、うまく信用してくれるかどうかという不安なのか。

「J・D!!J・Dなのか!!?」

《お、まだクイーンの部屋にいるみたいだな。》

司は声が奥の部屋からした事でまだ彼女達が逃げていない事に安心した。だが、司は違う問題に気付いた。

《あれ?日本語?英語とかじゃないの。》

話す言語が司には日本語に聞こえるのである。ここはたしかアメリカの設定である。共通言語は少なくとも日本語ではない。なのに、なんで日本語で話しているのだろうか。

『ああ、そのあたりは大丈夫だよ。聞こえてくる言語は日本語に変化するし、話す言語も自動で相手にわかる言語になるから。』

これが一番チートではないだろうか。もしこれを翻訳機械にでもして売れば特許だけでも遊んで暮らせるだろう。

《あれ?でも俺今のままじゃ話せないんですけど。書くほうも対応してるんですか?》

『そっちはしてない。』

現在司は「ギョ」や「ギャ」としか発音できない。なので相手に自分の話を聞いてもらうには書くしかないのだが、それは司自身でやるしかないという。拙い英単語を駆使して。

《テレパシーの方は?》

『テレパシーは基本同じような能力を持っている同士でしか出来ない。今あそこにいる人たちは無理だね。』

使えない。まさに八方塞である。怪物に間違われて撃たれかねないと本気で思った。だが、話さなければどうにもならない。このまま素直に出ていいものかと正直迷ったが、時間が無さ過ぎることもあって、そのまま姿を見せた。

当然、レッドクイーンの部屋にいた全員が硬直。司はとにかく近づこうと思い一歩踏み出した。

バン！

なにやら司の胸の辺りに衝撃が来た。衝撃といっても痛いものではない。駄菓子屋で売っている様な銀玉鉄砲くらいの衝撃だった。

バン！

次は頭に当たったがそれも全然痛くない。

「何だよ！！あれ！！」「モンスターだ・・・」「扉を閉めろ！はやく！！」「クイーン！扉のロックを！！」

全員が一斉に動き出し、クイーンの部屋の扉を閉めた。

だが、扉は閉まったもののロックはかからない。

「何してるの！！はやく！！！」

アリスがものすごく慌ててクイーンに命令する。

【あの生命体の情報はデータバンクにないわ。この研究所のものじゃない。危険とは限らないわ。】

「いいから！！早く閉めて！！！電流で吹っ飛ばすわよ！！」

【そうすればマズイのはあなた達でしょ。逃げ道も分からない、扉も閉まらない。私の役目は感染者を外に出さない事。それができるならあの生命体の行動を見てみたいわ。】

「そんなのほっといてこっちを手伝え！！ドアを押さえつけるんだ！！」

レインがアリスを呼びつける。生存者総がかりで扉を押さえつけている。あの怪物を入れさせないように。

一方、司の方は

《撃たれたんだよね？俺。全然痛くなかったんだけど。》

『当たり前だよ。今の司でも拳銃程度でやられるもんか。対戦車ライフルでも持ってこないと腕の１つも吹き飛ばせないよ。』

クイーンの部屋の前でそんな念話をする司とナイア。だがその扉は閉められ、司を入れさせないようにしている。強引に入ろうものなら、間違いなくまた撃たれてしまう。痛くもないが敵対されてしまうのはマズイ。

『手で押せば簡単に開けられるよ。精々１００キロくらいの力で押さえても今の司だと楽勝だよ。』

《でも、撃たれても平気なのは偶然とはいえ分かったけど。あの人たちに銃を撃ち尽くされると、ちょっと危ないと思う。自衛手段が格闘だけになるし、リッカーと戦うなら銃は必要だから。》

リッカーは原作と違い３匹もいる。全部が司に向かってくるのではないので、アリスたちにも万が一の自衛手段は残していて欲しかったのである。

『じゃあ、どうするって言うんだい？このまま地下に逃げるのを待って追いかける？』

《地下に行かれたらリッカーが襲い掛かってくるよ。原作でもそこ通ってたし。》

強引に行くのもマズイ。だか、そのままにして地下に行かれるのもダメ。そこで司は別の案を取った。

「なんだ？入ってこないぞ。」

カプランが扉に外から力がかからないことを疑問に言う。

「今のうちにクイーンから逃げ道を聞いて。あいつが入ってくるまで時間を稼げたら」

突然扉に信じられないような圧力がかかる。外から司が圧したのである。

「みんな！！もっと力を入れて！！」「やってるよ！！！なんて馬鹿力なんだ！！」「ダメだ！全然押し返せない！！」「ちくしょーー！！」

扉が３０センチほど開き、黄緑色をした明らかに人間でない手が覗いた。アリスたちは必死で扉を押し返すもびくともしない。
次に出てきたのは怪物の頭でも身体でもなく、大きな黒いバックだった。そのバックが部屋に放り込まれると、扉の圧力がなくなった。

バタン

扉は再び閉められた。

「え？」「なんなんだ？」「おい、このバックはなんだ？」

中にいたアリスたちは戸惑っている。怪物が押しかけてくると思いきや、バックだけ中に入れて当人は入ってこなかったのである。そして、その注目は怪物が入れてきたバックに注がれた。

「このバックは何？」

アリスがその放り込まれたバックに近づく。

「危険だ！何が入っているか分かったもんじゃないぞ！」

マットがそれを止めようとする。

「でも、確認しないとどうにも出来ないじゃない。扉の方は？」

「大丈夫だ。開けようとしてないみたいだ。」

扉を押さえていたレインが言う。

「クイーン。外の奴は？」

【その未確認生命体は扉の外で座ってるわ。壁に背をつけた状態で。】

その言葉に全員が戸惑いを見せる。

「一体アイツは何をしようとしてるのよ。」

アリスはバックに手をかけ中身を出す。中身は特殊なケースだった。電子ロックされているケースで中身は分からないが、重要なものが

入っている事だけは感じ取れた。

「なんだ、そのケース。なにが入ってるんだ。」

カプランが聞いてくる。

【理解不能だわ。】

その会話にレッドクイーンが入ってきた。

「どういうこと?」

【ありえないわ。なんであの生命体がそんなものを持っているの。しかも、なんでそれをこの部屋に入れたのか、理解不能だわ。】

「何が理解不能なの。分かるように説明なさい。」

レッドクイーンの言葉に説明を求めるアリス。

【それはT－ウイルスとT－ウイルスワクチンの入ったケース。この研究所でも極秘にされていたものよ。】

第四話　改造兵士　出会う（後書き）

最初の出会いでした。

生存者と間違われて、次は銃で撃たれました。強引に入るのをやめて、ワクチンを中に入れて様子を見る案にしてみました。

ワクチンを手に入れたことで無事治療できたアリスたち。外にいる司をどうするのか。

次回もよろしくお願いします。

第五話　改造兵士　対談（前書き）

遅くなりましたが、明けましておめでとうございます。今年最初の投稿です。

今年も頑張りますので、どうかよろしくお願いします。

第五話　改造兵士　対談

第五話　改造兵士　対談

≪レッドクイーンの部屋≫

【それはＴ－ウイルスとＴ－ウイルスワクチンの入ったケース。この研究所でも極秘にされていたものよ。】

クイーンの言った言葉に誰もが言葉を失った。あのゾンビを生みだした原因とそのワクチンと言ったからである。

「Ｔ－ウイルスワクチンっていうことは、治せるの？ウイルスを殺せるの！？」

アリスがクイーンの言った言葉を噛みしめて言う。

【Ｔ－ウイルスをコントロールし、無害なものにするのがワクチン。でも、感染して時間が経つと効くと言う保証はないの。】

「でもチャンスはあるんだろ？噛まれてまだそんなに時間が経ってないんだ。」

レインがクイーンの効かないという言葉に反論する。

【確かにまだ感染してからそんなに時間が経っていないわ。可能性は充分ある。でも運に任せる事なんてできない。】

クイーンの実験の裏打ちにより希望を得たレイン。他のメンバーも治療法を得られたことで自然と笑顔になる。すぐさまケースの電子ロックを解除し、ワクチンの注射をレインの腕に打つ。今のところ他に噛まれたりして感染したものはいなかったので、レインだけが治療を受けた。
治療も一段落し、今も扉の外に居るであろう存在のことについて話し合う。

「しかし、なんでこんなものをあのモンスターが持ってったんだ？こんな会社の機密に関わるものを。」

「何より、どうして私たちにこれを渡したのか。これが一番の疑問よ。」

マットとアリスがこれをなぜ自分たちに渡したのか、最大の疑問を口にする。

「あいつは入ろうと思えば入れたはずだ。なのに、そうせずに私たちにワクチンだけを渡した。」

「あいつは味方って考えていいのか？」

「だが、いくらワクチンを持ってきたからと言って味方と決めるのは早いと思うぞ。」

他の面々も疑問を口にするが、どれも憶測でしかなく決定的なものにはならない。

【あれはこの研究所で生み出されたものではないわ。】

「どういうこと？」

レッドクイーンが言った意味深な言葉に質問するアリス。

【実験生物はいくつか存在するわ。生体組織に直接Ｔ－ウイルスを注入して造られたものが。でも、そのどれもが不安定。中にはある程度知能を持つ者も存在する。でもあくまで与えられた命令を数個こなせるだけ。さっきのようにあれだけの力を持っていて、さらに高い知能まで持っている生物が完成したというデータはない。他の施設でもそんな成功例はないわ。あれは完全に成功した生体兵器よ。】

「生体兵器って。」

このハイブで行われていた実験のおぞましさを改めて知ったアリスたち。非人道的な実験が当然のように行われ、これほど危険な代物を取り扱っているここハイブ。そして、それを秘密裏とはいえここまで大掛かりな研究所を構えて行っている世界最大の民間企業アンブレラ社。

【生体兵器の目的は軍需がほとんどよ。もし、あれを量産できる体制を整えれば、とんでもない利益が生み出せることは間違いないわ。】

戦争ほど儲かるものはない、という言葉がある。戦争ではありとあらゆるものが凄まじい速度で消費されていく。食料や衣類だけでなく、武器や弾薬といった高価な物資も日常では考えられない速度で消費され、その分補給が必要になる。企業にとってこれほど旨味のあるものはないだろう。

アンブレラ社は表ではコンピューター・テクノロジーや医薬品、ヘルスケアの会社だが、裏では軍事技術の開発や遺伝子実験、細菌兵器の開発である。これが莫大な利益を上げ、その事故が現在の状況に繋がったのである。

「ねえ、クイーン。外のアイツにコンタクトは取れない？」

【外のカメラから声を送ることはできるわ。】

「なら、やって。」

【コンタクトをとってどうするつもり？そもそもあの生体兵器に言葉が通じないかもしれないのよ？】

「いいから早く！私達には時間が無いのよ。」

アリスが強い口調でクイーンに命令する。あと二時間もすれば自分たちはこの地下に閉じ込められる。脱出するにはあの元職員たちをどうにかして脱出しなければならない。もはや手段を選んではいられない。あの怪物が自分達に好意的ならば無事脱出できる可能性も出てくる。これは賭けであった。

こうして、怪物認定されている司と原作メンバーとの初めての対談が持たれ様としていた。尤も、話すのはレッドクイーンだが。

≪レッドクイーンの部屋の外≫

部屋の外には司が落ち着かないように座っていた。体育座りをしたり胡坐にしたり、正座したり、持っている鋭い爪で壁を引掻いたり。あまり動き回るとレーザーの有効範囲に入ってしまうので、動けないのである。

いくら司が超人的な身体と再生力を持っているといっても、レーザーはマズイと感じている。レーザーは「焼き切る」ので焼かれた部分の細胞が死んでしまい、その焼かれた部分を切除しないと再生できないのでは、と司は予想している。もし？の特殊工作員の隊長や？で最後に死んだドクターのように網目状にやられたら、おそらくアウトであろう。

『そんなに落ち着かないのなら、強引に入ったほうが良かったんじゃないのかい？』

ナイアが落ち着きのない司の様子にそう言う。

《とは言っても、また銃で撃たれるのは勘弁です。いくら大丈夫といってもいい気はしません。それにここで弾を撃ち尽くされかねないです。》

『一応リッカーはまだ3匹居る事だし、拳銃とはいえ持っているに越したことはないね。』

《でも、もし地下に降りようとするならすぐに追いかけます。見失ったら見つけられないと思います。》

『でも、どういうルートで帰るつもりだい？さっき来た道は、ゾンビは居なくてもリッカーが確実に1匹は居るし。地下にいってもそれは同じだろう。』

《そうなんですよね。それが一番の問題なんです。一体どうすれば…》

そんな念会話をする司とナイア。正直司が一人で倒してくれれば一番確実で簡単なのだが、その案は出てこない。あのようなグロテスクな怪物と取っ組み合いたくないというのが一番の理由であろう。

【ねえ、あなた。ちょっといい？】

突然声を掛けられて周囲を見回す司。人間の声のようであるがどこか機械的な声が司に掛けられた。

【私は上にある監視カメラから話しかけているの。】

そう言われて上を見る司。天井の隅に監視カメラが確かにあり、ないにやら赤いランプが点いていた。

【あなた、私の言葉が分かるのね。】

そういわれて驚く司。まだ言葉を喋ってもいないし、文字を書いてもいない。それなのにレッドクイーンは司に言葉を理解する知能があることを見抜いただけでなく、断定した。

【理由ならあるわ。あなた今私の言葉で監視カメラを見つけて注目したじゃない。声だけじゃどこから出しているか特定はすぐには難

しいわ。なのに、すぐにカメラに注目した。あなたは「監視カメラ」という言葉を理解しているという事になるわ。】

何気ない行動で即座に司が言語理解の知能があることを突き止めたレッドクイーン。伊達に施設全てを管理するコンピューターではないというところであろうか。

【話を続けるわ。話しかけたのは生存者達があなたに話した言っていうからなの。でも、あなたが味方であるという確証はない。あなたが味方であるという証拠が欲しいみたい。あなた、言葉は理解できるみたいだけど、話せるの？】

「ギョギェ、ギャ？」

【無理ね。言語パターンが不明だわ。理解不能。】

自分が言葉を理解できるという事は知ってもらえたが、やはり話せない事が最大の障害となってしまったようである。司自身は手話もできないし、ジェスチャーで物事を伝えるのは文化が違うせいもあって複雑な上、この見た目では説得力がなさ過ぎる。なので、司は仮面ライダーシンの力を使った会話をしようとした。それは念話でもなければ、レッドクイーンにシンの言葉のパターンを解析してもらうわけでもない。

シャッシャッシャッシャッ・・・・・・・・・・・・・・

【何をしているの？それは・・・言語解析開始。解析結果該当言語1。言語日本語ひらがな「はじめまして」。あなた、日本語が書けるの？】

レッドクイーンの言葉に頷く司。
司はシンの鋭い爪、ハイバイブ・ネイルを使って鋼鉄の壁に日本語で文字を書いたのである。シンのハイバイブ・ネイルは高周波振動を起こしていて、鋼鉄であろうと簡単に引き裂くことができる。その爪を使ったのである。

【なら、質問よ。あなたはなに？】

カキカキ（爪で壁に字を書く音　以下は略します）
「仮面ライダー　シン」

【解析「仮面ライダー」該当なし。「シン」があなたの名称？】

「水川　司　」

【解析　日本語漢字「水川　司」。日本人の名前の可能性有り。日本人？あなたは人間なの？】

「一応人間　この姿になってた」

【何が目的？】

「協力してほしい」

【何を？】

「ここから出たあとのこと」

こんな問答が続けられた。レッドクイーンは喋ればいいのだが司は書かなくてはならないのでどうしても答えるのに時間がかかってし

まう。それでも司は伝えなくてはならないので必死で指を動かす。

【中にはいって。彼女達と直接話し合ったほうがいいわ。】

そう言って入ることを促すクイーン。司は迷ったが、時間も無いので言われるまま扉に手をかけた。

≪レッドクイーンの部屋≫

【あの生命体を中に入れるわ。】

そう言われて慌て出すアリスたち。

「ちょっと!?いきなりどういうことよ!」

【あの生命体は人間とほとんど変わらない知能を持っていることが判明した。なら話も充分通じる。あとはあなた達が頑張って話しなさい。】

「大丈夫なのか?」

唐突な展開に心配になるマット。他の面々も同じような心境であろう。

【嫌なら自分達でなんのとかしなさい。私はウイルスが外に漏れなければいいんだもの。コンタクトまでとってあげたんだから、いいでしょう。】

「やっぱ吹っ飛ばしてやる！！」

カプランの持つ加電流のスイッチを奪おうとするレイン。彼女にとって４名の同僚を殺したのはゾンビではなく、この施設の防御システム。つまりレッドクイーンによって殺されたのである。レッドクイーンに対する恨みは強い。

「止めなさい！！いいわ、中に入れて。」

「おい！アリス！」

「さっきも言ったでしょう。今の私たちには時間がないの！！話ができるなら協力できるかもしれない。」

マットが止めようとするがその意見を制するアリス。

こうして、ようやく無事に原作メンバーと一応対談の場が設けられる事になった。

第五話　改造兵士　対談（後書き）

一気に更新速度が落ちてしまい申し訳ありません。
今回もあまり進んでいません。このメンバーで誰も欠けずに無事に出られるのか・・・

「対談」とありますが、正確には「レッドクイーンとの対談」です。
次回からようやく原作メンバーと話合い？ます。

今年もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5213p/

映画　バイオハザードー改造兵士の介入ー

2011年1月13日07時07分発行